

## 4-1-6-2 内視鏡科

### 1. 概要

内視鏡科の人員は医長1名であるが、外科・消化器科をはじめとする他科と連携をとりつつ消化器内視鏡検査を施行し、疾患の診断ならびに治療を行っている。施行可能な内視鏡的治療として、食道・胃静脈瘤の硬化療法ならびに結紮療法、消化管狭窄に対する拡張術、異物摘出術、腫瘍性病変の粘膜切除術ならびにポリペクトミー、消化管出血に対する止血術(局注法およびクリッピング)、総胆管結石除去術および胆道ドレナージ、経皮的内視鏡下胃瘻造設術などが挙げられるが、今年度は新たに食道アカラシアに対する専用拡張バルーンを導入した。

### 2. 診療活動

2003年4月から2004年3月までの消化器内視鏡検査総数は270件(昨年度298件)であった。(外科単独での施行例を含む。)このうち上部消化管検査(内視鏡的逆行性膵胆管造影・術中胆道鏡を含む)は212件(昨年度206件)、下部消化管検査は58件(昨年度92件)であり、昨年度に比して下部消化管検査の件数が若干減少した。これは検査対象の多くを占める炎症性腸疾患(潰瘍性大腸炎・クローン病など)患者が昨年度中に概ね定期検査を済ませたことが原因と考えられた。

月ごとの検査件数の推移をみると、昨年度と同様に夏(7~9月)に多く、これに春が続く傾向が見られたが、やはり学生の休暇に一致するものと考えられた。

内視鏡的治療では食道静脈瘤の結紮術、消化性潰瘍(胃潰瘍・術後吻合部潰瘍)の止血術(エタノール局注法およびクリッピング)、大腸ポリープに対するポリペクトミー、食道狭窄に対する拡張術、食道アカラシアに対するバルーン拡張術、胃瘻造設術、上部消化管異物除去術をそれぞれ施行した。

検査場所別にみると内視鏡室(局所麻酔での検査)が167例、手術室(全身麻酔での検査)が103例であった。内視鏡室で鎮静を用いずに通常検査を受けた患者の最低年齢は、上部消化管で12歳、下部消化管検査では11歳であり、昨年度と同様に自覚症状も含めて大きな問題もなくスムーズに検査を受けることが出来た。上部および下部内視鏡検査ともに、10歳以上の年齢であり、かつ検査の必要性を理解できる患者であれば、成人と同様に通常の内視鏡室での検査が可能であることが確認された。

検査の介助を担当する看護師には若干の異動があったが、前任者からの引継ぎと症例経験の積み重ねにより、内視鏡検査・各種手技に関する知識および内視鏡検査を受ける患者に対する心理的サポートがともに向上し、現時点で通常検査を行うに際して問題のない状況にある。

